

母親を対象とした子育ての意味に関する調査

山 口 雅 史*

Investigation about a Meaning of Child Care in Mothers of Infants

Masafumi YAMAGUCHI

問 題

親になるとはどういうことであろうか。親になることそのものを取り上げた研究は、近年徐々に増加しつつある。わが国の例を挙げても、育児不安に焦点を当てつつ母親の発達を検討した牧野（1982）、親になることによって生じる人格的な発達や変化について検討した牧野・中原（1990）、柏木・若松（1994）、母親の適応過程を丁寧に追跡調査している氏家・高濱（1994）、出産前後の夫婦を対象とした縦断的研究を行った小野寺・柏木（1997）など、様々な側面から検討が加えられつつある。

これらの成果により、母親や父親になるという経験を通じて、女性、男性ともに多くの面で心理的な変化や発達が見られることが明らかになってきている。同時に、必ずしも生物学的な意味で親になることが、“親になる”ことではないことも明らかになってきた。

それまでの人生を親ではない存在として生きてきた個人が、出産を契機として親と呼ばれる存在になる。もちろん子供を持つ前の自分も、子供を持った後の自分も、どちらも同じ自分であることには変わりはない。しかし、親という存在になることによって、その個人には親としての役割や意味が付与され、社会的にも親としての態度や行動を要求されるようになる。筆者は、このような親になる過程を“親同一性”という視点から検討を加えてきた（山口，1997；山口，2001；山口，2003a）。

山口（2004）では、“親である”ということが、親自身によってどのように認知されているのかについて検討を行った。“親になる”ことによって親自身の人格に様々な変化が起こることは多くの研究で示されている。例えば、牧野・中原（1990）、柏木・若松（1994）、若松・柏木（1994）は、親になることに伴う人格の発達や変容について調査研究を行っている。ただし、これらの研究は、親になることに伴って親がどのように変化するのかを問うた研究であり、親であるということを親たちがどのように認識しているのかを明らかにしているとは言えない。同様に、「どうして子供を生もうと思ったのか」を問う“子産み”の理由に関する調査も行われているが（柏木・永久，1999）、子供を持つことに

* 人間関係学部 人間関係学科

した理由については検討されているものの、子供を持ったことが（すなわち親になったことが）自分にとってどのような意味を持っているのかを明らかにしているわけではない。そこで、“親である”ということがどういう意味を持ったものとして受け止められているのかを、幼稚園児の母親を対象として検討を行った。

また、山口（2006）では、少し視点を変えて、“親であること”ではなく“子供を育てること”に焦点を当てて、幼稚園児の父親を対象として検討を行った。

本報告は、子供を育てることの意味について幼稚園児の母親を対象に行った調査のまとめである。

方 法

(1) 調査内容

「子供を育てる」ということに、あなたはどのような“意味”や“価値”を感じていらっしゃるでしょうか？ 個人的な意見でかまいませんので、思いついたままをご自由にお書きください。」という教示のもと、自由記述形式で回答させた。

(2) 調査手続き

調査は、愛知県名古屋市の公立幼稚園1園、愛知県岡崎市の私立幼稚園1園の在園児の母親を対象として実施した。

本調査は、複数の調査項目（親同一性尺度等）をまとめて1つの調査票にしたものの一部として実施し、各クラス担任を通じて配布回収するという手続きを取った。

372部を配布し、回収したのは280部。したがって回収率は75.3%であった。回収した280部のうち、回答に不備のあった13部に関しては分析から除外し、残り267部について集計を行った。

(3) 回答者の属性

母親の年齢の平均は35.0歳（SD=3.81）で、26歳から46歳であった。子供の数の平均は2.0人（SD=.64）であり、1人から4人の子供を持っていた。長子の年齢は平均6.2歳（SD=2.40、3歳から15歳）、末子の年齢は平均3.4歳（SD=1.81、0歳から6歳）であった。

また、対象者267名のうち、常勤で就労している者は7名（2.6%）、パートタイムやアルバイトなど非常勤で就労している者は36名（13.5%）で、224名（83.9%）が就労していなかった。

さらに、対象者の最終学歴の内訳は、中学・高校卒66名（24.7%）、専門学校・短期大学卒116名（43.4%）、大学・大学院卒85名（31.8%）であった。

結果及び考察

記述された内容に基づき回答の分類を行った。（Table 1 参照）

回答は自由に記述する形式でなされたため、複数の内容を含んでいる場合分割して分類

母親を対象とした子育ての意味に関する調査

Table 1 子育ての持つ意味についての回答の分類

記述内容による分類	記述数	百分率(%)
自己の成長、視野の広がり	123	49.8
子供とともに自己が成長する	79	32.0
自己の視野が広がる	32	13.0
人との出会い、社会とのつながり	12	4.9
情緒的な反応	62	25.1
肯定的なとらえ方（生きがい、幸せ）	31	12.6
両価的なとらえ方（辛いけど、幸せ）	22	8.9
否定的なとらえ方（辛くて、大変）	9	3.6
世代を超えて	57	23.1
自己の親について考える	29	11.7
人類（社会）繁栄のため、次世代構成員を育てる	16	6.5
自己の経験、血縁、生命、等を伝える	7	2.8
親子、家族の絆を深める	5	2.9
親としての役割	51	20.6
子供を援助し、育てる	37	15.0
重い責任を自覚する	14	5.7
特別な意味や価値はない	28	11.3
自然なこと、当たり前のこと	14	5.7
考えたことがない、わからない	14	5.7
その他（分類不能）	17	6.9
その他（分類不能）	17	6.9
合 計	340	137.7

注：①有効回答者数は247である。

②複数の内容が含まれる記述は複数のカテゴリーに重複して分類した。従って、分析対象とした記述数の合計は有効回答者数の247を超え340となっている。

③百分率欄には、有効回答者数（247）に対する割合を記入した。従って、合計は100.0%を超え137.7%となっている。

した。また、複数の内容を含んでいる場合であっても、文章全体の構造を考えると文単位に細かく分割することは困難なものがあつた。そこで、1人の回答に複数の内容が含まれており、かつ分割が不可能と判断した場合は、同一の回答を複数のカテゴリーに重複して分類した。

したがって分類に使用された回答の合計は、総回答数（すなわち、対象者数）を上回っている。また、各カテゴリーの割合を示す百分率は、総回答数に対する各カテゴリーに分類された回答数の割合の形で示してある。なお、無回答が20部あつたため、分析は247部について行った（総回答数は247）。

回答は全部で4つ（その他を含めると5つ）のカテゴリーに分類され、さらにそれらはいくつかのサブカテゴリーに分類された。

(1) 自己の成長、視野の広がり

このカテゴリーは、有効回答者数の約半分49.8%にあたる123名の記述が分類され、今回の調査で、もっとも記述数が多かった。山口（2004）の母親を対象とした同様の調査でも、親であることの持つ意味として全体の55.1%が〈母親自身の成長〉をあげており（※注①）、本研究の回答もほぼ同じような傾向を示していることがわかる。

牧野・中原（1990）は、乳児から中学生までの子供を持つ親を対象に子育てに伴う親の意識の変容についての調査を行い、その中で、「子供を生み育てることの意義」についても質問を行っている。その結果からも、“子育ては自分の成長につながる”という回答が父親（19.0%）、母親（39.3%）ともに最も高いことが読み取られ、子育て中の親にとって自己の成長の意識が広く持たれていることがわかる。

ひとつには、親たちがアイデンティティの再構築を模索している姿の表れとしてとらえることができるかも知れない。十代、二十代の青年期を個としてのアイデンティティを形成することに費やしてきた者たちは、結婚をし、子供が生まれることで、新たに親としてのアイデンティティを作り上げなければならなくなる。

作ってきたばかりのアイデンティティを見直して、もう一度親としての役割を取り入れたアイデンティティに作り直すことは大変な苦勞を伴うのかも知れない。そのための苦勞を少しでも肯定的にとらえるために、時間的な展望をともなって、「成長」という生涯発達の視点で自己の努力を受け入れようとしているのではないだろうか。

また、カテゴリーを細かく分析してみると興味深い側面が見えてくる。このカテゴリーは〈子供とともに自己が成長する（32.0%）〉、〈自己の視野が広がる（13.0%）〉、〈人との出会い、社会とのつながり（4.9%）〉の3つのサブカテゴリーに細分化することができる。

特に注目すべき点は、少ない人数ながら、〈人との出会い、社会とのつながり（4.9%）〉というカテゴリーに分類された記述である。例えば、「価値観の違う人達とも関わるようになりました（12003）」、「子供を育てていくうちにたくさんの人に出会い（22081）」、「仕事を辞め主婦をしている私にとって、社会とのつながりを作ってくれる（22089）」などというものである（「」内の下線を附した斜体による記述は対象者による回答の一部をそのまま抜粋、記述したものである。（）内の数字は対象者の整理番号である）。

従来、子育て中の母親の悩みの中で大きな位置を占めているのが、「社会から取り残されたように感じる」というものであった（例えば、大日向；2000）。確かに、多くの母親、特に乳児期の子供をもつ母親が、育児に忙殺されて自分の時間を十分に持つことができず、孤立感、疎外感に包まれているのも事実であろう。この疎外感を解消し、気軽に話や相談ができるソーシャルネットワークを構築することが、子育て支援の重要な支援ポイントにもなっているが、未だ十分な解決に至らない家庭も多いのではないだろうか。

しかし、今回調査に協力してくれた母親たちの中には、わずか12人（有効回答者の4.9%）に過ぎないが、子育てをすることで新たな人との出会いを経験し、子育てが「自己が社会とのつながりを作るための手がかりになっている」という肯定的なとらえ方をしている母親たちがいた。この点は、より現実的な子育て支援を実現するためにも、今後検討してみる価値のある視点と言えるのではないだろうか。手のかかる乳児期の育児を過ぎ、幼児期に至っていることもその一因かも知れない。

さらに、このカテゴリーは上述の親アイデンティティの確立という点とも関連している

可能性がある。青年期のアイデンティティの形成の際、人は内面的な自己の確認と、社会的な自己の確認という2つの側面から、自己を見いだそうとする。親としての側面を加えたアイデンティティもおそらく同様の道筋をたどるのではないか。つまり、内省をくり返し、内面から自己を見つめ直す作業と、様々な人々と付き合い、他者から見た自己像を取り入れ、社会的な側面から自己を見つめ直す作業である。

今回の12人の母親たちはこの作業が比較的スムーズに進んでいるのかも知れない。そのために人との出会いを子育てに伴う肯定的な価値として指摘しているのではないだろうか。ただし、全体の4.9%に過ぎないという点は問題であるとも言える。もしかしたら、この点、つまり社会的な視点からの自己の見直し作業がうまくいっていない母親が多く、そのために生じた不安全感が、育児期の社会からの疎外感を増長させているのかも知れない。

今後、この点についても精緻な検討を進めていきたい。

(2) 情緒的な反応

このカテゴリーには、62人の回答者の記述が分類され、25.6%の母親が記述している。このカテゴリーは、さらに3つのサブカテゴリーに細分化される。

「子供は愛おしく、自分のところへさずかって幸福だと思う (12010)」や「子供のためなら命さえ惜しくはないという気持ち (12020)」などの子育てを積極的肯定的にとらえている〈肯定的なとらえ方 (12.6%)〉。

「社会的視野が狭くなっていく気がする事もあるが、今しか出来ない貴重な時間を与えられたと感謝している (12018)」、「子育てすることは大変なことも多いけれど、喜びのほうが多いと思います (22019)」といった、子育ての大変さ、辛さと幸福感を合わせて記述し、子育てのアンビバレントな側面をとらえている〈両価的なとらえ方 (8.9%)〉。

「子供を育てるということは、人生の中の『自己犠牲の期間』だと思っています (12020)」や「結婚してからも子供がキライで、私には関係のない世界に今“居る”という感じのまま子育てをしてきているので、“楽しい子育て”を感じた事ことがない (12039)」など、子育てを辛く大変なものとして否定的に捉えている〈否定的なとらえ方 (3.6%)〉である。

「生きがいや幸せ」といった肯定的な視点で子育てをとらえることは、牧野・中原(1990)にも見られ、母親で2番目に多いカテゴリー(24.5%)となっている。また、母親になることに伴う人格の変容について調査した柏木・若松(1994)は、6つの次元で変容が生じることを示したが、その中でも「生きがい・存在感」に関する次元が見出されている。このように子育ての意義を自分の生きがいであると位置づけることはいくつかの研究で共通して見出されており、本研究でも同様の傾向が認められたことになる。

ただ、本研究では肯定的に子育てをとらえているのは31名、全体の12.6%に過ぎず、それほど高い数字とは言えない。牧野らの結果では2番目に多いカテゴリーであったことを考えると本研究の親たちの記述数は若干少ないようにも思える。1つには、本研究の対象者の子供の年齢が幼児期を中心に行っていることによるのかもしれない。牧野らが調査している小中学生の児童期、青年期の子供にくらべ、幼児期の子供は親への依存度が高く、いわゆる“手のかかる”時期でもある。つまり、それだけ親の育児における負担感が増すことになるのではないだろうか。その分、育児にともなうストレスも多く、幅広い年齢層

の子供の親を対象とした牧野らの結果に比べ、子育てに“生きがいや幸せ”を感じる事が難しくなっているのかもしれない。

また、もう1つの可能性として、データの収集法の違いも考慮する必要がある。牧野らも柏木らも、どちらもあらかじめ質問を用意し、五件法で回答を求める尺度構成法を用いているのに対し、本研究では自由記述法を用いている。そのため、微妙なニュアンスの回答が可能となり、〈両価的なとらえ方〉というサブカテゴリーを置かざるをえなくなってしまうことによるのではないだろうか。両価的なものも“苦労はするけれども、結局は幸福である”という記述内容から、結論としては〈肯定的なとらえ方〉と考えると、両者合わせて53名、全体の21.5%が肯定的なとらえ方をしていることになり、牧野らの結果に近づくようにも考えられる。

(3) 世代を超えて

このカテゴリーも、56人と4分の1近くの母親が記述している。〈自己の成長、視野の広がり〉のカテゴリーで見たような“個人の成長”という枠組みを超えて、長期的な時間軸でとらえた“家族”あるいは“血族”という意識がうかがえる。このカテゴリーは、4つのサブカテゴリーに細分化される。

もっとも多いのは、29人、11.7%の母親が記述した〈自己の親について考える〉である。牧野・中原(1990)では少し意味合いが異なるが、〈親への感謝〉というカテゴリーとして、子育てを通して学んだことの中で9.8%の母親が回答している。

「あらためて自分を育ててくれた両親の大変さを感じ、両親を大切に思う気持ちが今まで以上になりました(12011)」、「子供を持ち親になって、あらためて自分の両親に感謝する(12089)」、「私が親に育ててもらったことのありがたさや子供への愛情の深さを、親になった今改めて感じている(22030)」など、いずれも育ててもらったことへの感謝の気持ちが記述された肯定的な表現のものであった。

共通していることは、自分が子育てをして初めて親の気持ち(愛情、苦労、大変さなど)が理解できたという点である。育てられる側から育てる側へと変化してきたことで、初めて自分の親を客観的な視点で見ることができるようになったのかも知れない。愛情や感謝という言葉が散見されることから、“子育て”という同じ苦労を味わった“同志”というような連帯感を感じているのではないだろうか。

次いで多いのは、〈人類(社会)繁栄のため、次世代構成員を育てるため〉というカテゴリーである(16人、6.5%)。「将来を担う人間を育てるという事は、とても重要で責任ある役割だと感じている(12090)」、「自分だけの子としてではなく、未来を担う存在を育てるという意味では、とても大きな価値を感じる(22055)」、「子供を育てることも働いているのと同じようなもので、社会のためになることだと思う(22092)」など、個人という枠組みを超えて、次世代の社会の構成員を育てていることに価値を見いだしているのである。

同じように次世代を育てるという思いでも、〈自己の経験、血縁、生命、等を伝える〉というカテゴリーは微妙に意味合いが違っているように思われる。「自分が今まで生きてきたこと(家族というその家独自の文化)を次の世代に伝えていき(12043)」、「ずっと受け継がれている遺伝子の伝達として、大切に育てて将来我が子が親となった時に同じよう

に子供を慈しんでいてくれたらなと思う (12114)」,「利己的遺伝子による子孫繁栄 (12127)」など、自分自身が持つ有形無形の何かを子供に伝えたいという記述が、少ないながら6人(2.4%)に見られた。

血のつながりを意識するという点では、自分の家族との絆について触れている〈親子、家族の絆を深める〉というカテゴリーも同様であるように思われる。「子供を育てることにより家族のきずなみたいなのができるのかなとも思う (12037)」,「子供が一人増えるごとに育児は大変になるけれど、その分の家族のつながりも強くなっていつている (22038)」など、5人(2.9%)の母親が記述している。

Erikson (1995) は、本研究の対象者と同じ成人期の発達課題を、次世代を育成するための課題である「生殖性 (世代性)」であると位置づけている。ここに分類したカテゴリー内容は、まさに生殖性の課題を達成しようとしている姿の表れと考えることができるのではないだろうか。

人類全体のためか (〈人類 (社会) 繁栄のため、次世代構成員を育てるため〉)、個人の血筋のためか (〈自己の経験、血縁、生命、等を伝える〉) という区別を除くと、22人(8.9%) がほぼ同様の記述を行っていることになる。さらに、自分の親の行ってきたこと、つまり、親にとっては「次世代の構成員」にあたる自分を育ててきたことに思いを巡らせているのも、生殖性の課題に直面していることと無関係ではあるまい。この課題を達成した1つの身近なモデルケースとして自己の親をとらえ直そうとしているとも言えるかも知れない。

(4) 親としての役割

〈世代を超えて〉のカテゴリーとほぼ同数(52人, 21.1%) が分類されたものが、〈親としての役割〉に関するカテゴリーである。これは2つのサブカテゴリーに細分化される。

1つは、子供を育てることに積極的に言及している〈子供を援助し、育てる〉というカテゴリーである。37人(15.0%) の母親が記述している。「とにかく一生懸命子供の思いをかなえて、自信や生きる力をつけてもらい、しっかりとした考えを持って生きていける人になって欲しい (12006)」,「将来自分の家庭を築くまでの自主性や社会性を養うために、見守り、サポートしていかなければならないと思っています (12046)」,「子供が生きてきて良かったと感じられる手助けができたと思う (22037)」などである。

もう1つは、子供を育てるという親としての責任の重さについての記述を分類した、〈重い責任を自覚する〉というカテゴリーである(14人, 5.7%)。「育児は子供の人格形成に多大な影響を及ぼすため、毎日あれこれ悩まされることが多くなります (12015)」,「自分の思うようにはいかないし、かといって投げ出すこともできないから、自分に与えられた人生においての課題 (12087)」,「子供を産んだ以上、絶対に投げ出すことができない責任です (22130)」などである。いずれも共通しているのは、責任が重いから逃げ出したいというような消極的な記述ではなく、自らの課題として積極的に引き受けていかなければならないというようにとらえられている点である。

このカテゴリーは牧野・中原(1990)には見られないものであった。これは1つには対象者の子供の年齢に影響されているのかもしれない。牧野・中原の対象者の子供は乳幼児から中学生までとなっている(子供の平均年齢等についての記述はなく不明)のに対し、

本研究では“幼稚園に通っている幼児”である。もちろんきょうだいがそれ以外の年齢である場合も多いが、少なくとも1人以上の子供が現段階で幼児期を過ごしていることになる。乳幼児期は、小学生以上の子供に比べると親への依存度が非常に高く、いわゆる“手のかかる”時代である。そのことが親による育児への関与の高さを生み、“子供を育てる”という役割への高い注目を生み出した可能性が考えられる。

また、〈自己の成長、視野の広がり〉のところでも触れた“親としてのアイデンティティ”の再構築とも関連しているのかも知れない。つまり、今作り上げようとしているのは、“親としての役割”が新たに加わったアイデンティティである。その新しい自分の姿を模索するにあたって、親としての自分にどのような役割が割り振られてきたのか、必死で見極めようとしているのではないだろうか。その結果が、このカテゴリーに分類された記述になってあらわれてきたのかも知れない。

総合的考察

幼稚園児の子どもを持つ母親が意識している子育ての意味や価値について、4つのカテゴリーからとらえてきた。そこからうかがえるのは、親アイデンティティを構築しようと苦悩し、努力している母親たちの姿であった。

〈自己の成長、視野の広がり〉というカテゴリーから見えてきたのは、子育ての中で自己が変化しつつあるという認識である。しかも、その変化を、時間的展望に立って“成長”というとらえ方をすることで、積極的、肯定的な意味を見いだしていこうとする姿が認められた。さらにこの時間的展望を伸張させたところに、〈世代を超えて〉というカテゴリーに分類した、〈人類（社会）繁栄のため、次世代構成員を育てるため〉、〈自己の経験、血縁、生命、等を伝える〉の2つのカテゴリーが位置付くのかも知れない。つまり、個人という枠を越えて長期的な展望に立つことで、自らに新たに与えられた“親”という役割を自己のアイデンティティに取り込む意義を模索しているのではないだろうか。

それは、〈情緒的な反応〉カテゴリーで見られたような、子供を育てることを情緒的な面からも、肯定的にとらえようとする姿からもうかがえる。情緒的に肯定的にとらえることで、親役割をアイデンティティに取り入れようとする試みを正当化し、積極的にアイデンティティの再構築を行うことを後押ししようとしているかのようにも見えるのである。

同時に認知的な側面から親アイデンティティを受け止めようとする試みが、〈親としての役割〉カテゴリーにあらわれているのではないだろうか。〈重い責任を自覚する〉とともに〈子供を援助し、育てる〉という役割を明確化し、受け入れるための意味を探しているのだと考えられる。

このように新たなアイデンティティを構築する際に、もっとも身近なモデルとなるのが、自らの親なのであろう。〈自己の親について考える〉カテゴリーに見られるように、肯定的な価値を見いだしながら、親として先輩にあたる自らの親に思いをはせることが、アイデンティティ再構築の試みに立ち向かう勇気をもらうことになっているのかも知れない。

今回は、子育ての意味や価値についての自由記述の回答についての分析を行ったが、今回得られたデータは、親アイデンティティの形成との関連性を検討しつつ、より詳しく分

析していくことを予定している。

引用文献

- Erikson, E. H. 1963 *Childhood and society*. 仁科弥生 (訳) 1995 幼児期と社会, みすず書房.
- 柏木恵子・若松素子 1994 「親となる」ことによる人格発達——生涯発達の視点から親を研究する試み——, 発達心理学研究, 5, 72-83.
- 柏木恵子・永久ひさ子 1999 女性における子どもの価値——今, なぜ子を産むか——, 教育心理学研究, 47, 170-179.
- 牧野カツコ 1982 乳幼児をもつ母親の生活と育児不安, 家庭教育研究所紀要, 3, 43-56.
- 牧野カツコ・中西雪夫 1985 乳幼児を持つ母親の育児不安——父親の生活及び意識との関連——, 家庭教育研究所紀要, 6, 11-24.
- 牧野暢男・中原由里子 1990 子育てに伴う親の意識の形成と変容——調査研究——, 家庭教育研究所紀要, 12, 11-19.
- 大野祥子 1999 父親であること 子どもの養育者としての役割, 柏木恵子 (編) 結婚・家族の心理学, ミネルヴァ書房, 149-185.
- 大日向雅美 2000 母性の研究——その形成と変容の過程: 伝統的母性観への反証——, 川島書店.
- 小野寺敦子・柏木恵子 1997 親意識の形成過程に関する縦断研究, 発達研究, 12, 59-78.
- 氏家達夫・高濱裕子 1994 3人の母親——その適応過程についての追跡的研究——, 発達心理学研究, 5, 123-135.
- 若松素子・柏木恵子 1994 「親になること」による発達——職業と学歴はどう関係しているか——, 発達研究, 10, 83-98.
- 山口雅史 1997 いつ, 一人前の母親になるのか?——母親のもつ母親発達観の研究——, 家族心理学研究, 11, 83-95.
- 山口雅史 2001 親同一性を構成する3つの次元——幼児期の子どもを持つ母親における親同一性の構造——, 家族心理学研究, 15, 79-91.
- 山口雅史 2003a 子ども優先度及び育児効力感が母親同一性形成に及ぼす影響, 愛知教育大学研究報告52 (教育科学編), 39-44.
- 山口雅史 2003b 母親になる過程を巡って——親になる過程を巡る2人の母親への面接調査——, 日本保育学会第56回大会発表論文集, 310-311.
- 山口雅史 2004 “親である”ってどういうこと?——母親を対象とした親であることの意味に関する考察——, 愛知教育大学研究報告53 (教育科学編), 47-52.
- 山口雅史 2006 幼児の父親を対象とした“子育て”の意味に関する調査, 愛知教育大学研究報告55 (教育科学編), 29-34.